

校内の情報教育実践の意識を高めるための 相互プレゼンテーションによる教員研修

中川 斉史*1 堀田 龍也*2

校内の情報教育の重要性とその指導のポイントをすべての教員に意識してもらうために、校内で、相互のプレゼンテーション大会を企画し、実施した。これらを通して職員の意識の変化や、実際のプレゼンテーション技術がどのように変わっていったかについて調査してみた。すると教師のプレゼンテーションに対する意識が大きく変化していることがわかったので、報告する。

<キーワード> 教員研修 情報教育 プレゼンテーション

1 はじめに

すべての教師が、情報教育をする力を身につけることが大きな課題となっている。それを打破するための具体的な研修活動として、教師のプレゼンテーション（以下プレゼン）をさせることは、とても意味あることだと思う。特にこれからの教師は、プレゼンができることが教師としての必須条件であると考えられる。

平成14年6月に文科省から出された「情報教育に関する手引き」*1では、各教科の指導において、すべての教員がコンピュータやインターネットを活用することや、教員すべてが校内研修をはじめとする様々な研修機会を積極的に活用することが必要と書かれている。さらに、校内研修の進め方として、例えば、OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）の観点が必要とされている。

教師は、いつも子どもたちの前で話している割には、プレゼンの経験は意外と少ない。研究発表などを引き受けない限りは、大勢の人前でプレゼンをするなどということは、経験しないかもしれない。そこで、プレゼンを

全員が経験する場を設定することで、そのツールの使い方の習得以上に、物事の見せ方や、画面と話し方の分量、画面の効果的な切り替え方など、見よう見まねではなかなか本質に迫れない内容についての研修ができるのではないかと考え、実施した。

これは、校内において教員によるプレゼン大会を校内研修の枠に位置づけ、実施したものを調査し、問題点と成果をまとめたものである。

2 研究の方法

<目的>

◆校内プレゼン大会を研修に持ち込むことで、教師に次のような情報教育の視点がつくことを目的とする。

(1) 教師のプレゼンスキルの向上

(2) 子ども達へのプレゼン（発表）指導の必要性を感じる

(3) 研修としての効果

<実施校>

◆徳島県池田町立池田小学校

（16学級，教員数30人）

*1 徳島県三好郡教育ネットワークセンター（池田小学校）(hito@idearoom.net)

*2 静岡大学情報学部 (horita@horitan.net)

<実施時期>

◆ 2001年7月, 12月, 2002年3月の3回

<プレゼン大会の内容>

◆各学年の「生活科」, 「総合的学習の時間」についての取り組みを中心に, 他の学年の先生方に, それぞれの学期に行ったことをプレゼンツールを使って, 発表する。

<調査方法>

◆実際にプレゼン大会に参加し, 発表をした教師に対して, 3学期の発表会終了後にアンケート調査(結果1)

◆各学期の映像記録から, 教師の発表態度の変化について分析(結果2)

◆回答数20人

3 調査項目とその結果

<結果1 アンケートより>

(1) 参加者の意欲について

Fig.1 のように年間3回のプレゼン大会については全員がメリットがあったと感じている。

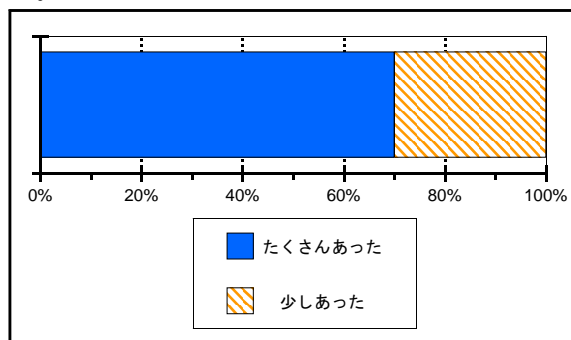


Fig.1 参加してメリットがあったか

(2) 他人のプレゼンの影響

Fig.2 では, 他人が行ったプレゼンの内容や手法が参考になったかどうかのグラフである。例えば, 見せ方の工夫や表示の方法, まとめ方の例などが役に立ったとしており, 好評である。

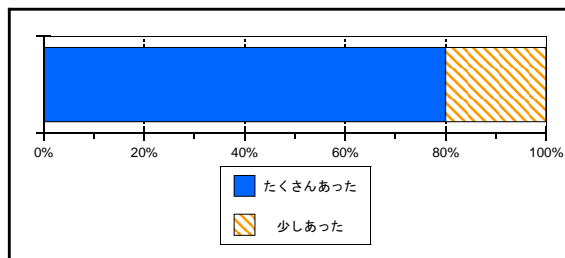


Fig.2 他人のプレゼンは役に立つところがあったか

(3) プレゼン大会の問題点

このようにおおむね目的達成のプレゼン大会であるが, 問題点もある。Fig.3 では, それについて, 質問した。

プレゼンそのものを経験したことのない人にとっては, 準備は大変だったようである。あまり困らなかったという人は, すでに何度かプレゼンを経験していることと, そのための資料準備ができていたからだと考えられる。

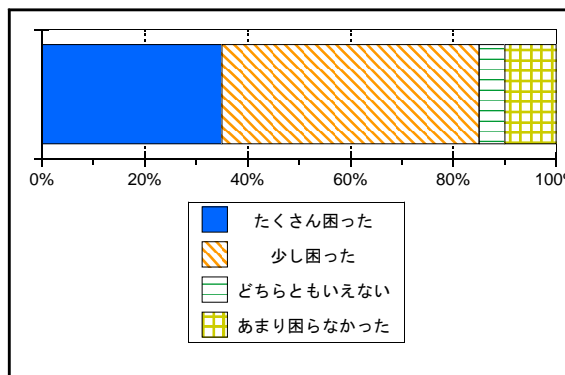


Fig.3 プレゼン大会準備について



写真1 校内プレゼン大会当日(3回目)

(4) 問題点の内訳

Fig.3 で、プレゼン大会をすることに対して、教師がかなり困っていることもわかった。その内訳を Fig.4 で調査した。やはり時間的な部分と資料蓄積についての問題点をあげた人が多い。

そこで、(3) で「困らなかった」と答えた人に「準備のために、どのようなことに気をつけてきたか」と質問したところ、「ふだんから自分の実践を人に紹介できるような場面は必ず写真に納めていた」とか、「昨年の失敗（プレゼンの資料不足）をふまえて、ある程度を計画性のある実践をした」などという回答が寄せられた。

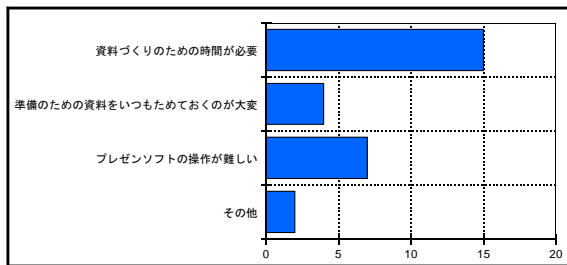


Fig.4 プレゼン大会の問題点

(5) 子どもたちへの指導の変化

プレゼン大会の目的として、ふだんの授業などで子ども達への発表の仕方や資料提示の工夫などに変化があることを期待しているので、それらについて質問してみた。

Fig.5 にあるとおり、「あった」と答えた人は70%と高く、プレゼン大会の経験が授業に生かされていると感じている人が多いことがわかった。

そこで、具体的にその変化を質問したところ、「ふだんの授業の中で、発表をする場面をととても大切にするようになった」や、「聞く側を意識して発表するように指導している」など、情報教育のねらいの一部を教師が意識し始めたことがわかった。

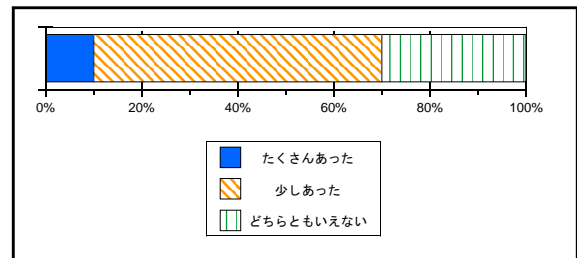


Fig.5 子ども達への指導に変化があったか

(6) 教師の意識の変化

プレゼン大会の経験により、プレゼンに対する教師の意識がどのように変化しているかについて、Fig.6 にまとめた。

これによると、やはり他人のプレゼンを見る際に、詳しく見るようになったと答えた人が多かった。

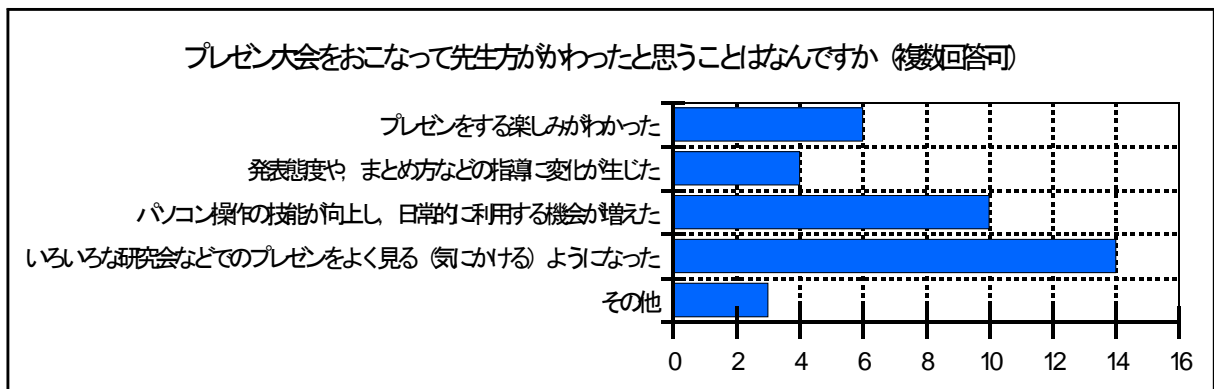


Fig.6 教師の意識の変化

<結果2 映像の記録から>

表1 1回目と3回目の教師のプレゼン方法の比較

	原稿のスタイル	アイコンタクト	プレゼン操作	態度から見た自信
1 回 目	発表内容と同じ言葉を文章として記述	原稿へ視線を落とす頻度が多く、なかなか聴衆へあわせられない	発表者とプレゼン操作をする人が分担されている	見ていると恥ずかしさがかかるほど、自信がない
3 回 目	要点を箇条書き、原稿を全く用意しない人もいた	自然な形で、聴衆への目配せができていた	発表者とプレゼン操作は同一人物	堂々としており、聞いてもらおうという自信がみなぎっている

4 考察

(1) 「教師のプレゼンスキルの向上」について

回数を重ねるごとに、どの教師も堂々と発表していることから、プレゼンをする目的である「伝えたい」という気持ちを前に出したプレゼンができるようになった。特に表1に現れているように、回数が増えると教師のスキルは、確実に向上している。

このことから、同じ年度内に複数回プレゼン大会を開き、自己または相互反省を次のプレゼンへつなげるようにすることがよいのではないかと考える。

ただ、各開催日の取り方は校内事情に大きく左右されるので、一概にはいえないが、じっくり取り組めるという意味で、長期休業中が望ましいと考える。

(2) 「子ども達へのプレゼン指導の必要性を感じる事」について

第1回目のプレゼン大会でも、素晴らしいプレゼン技術のある教師もいる。その教師が、どんなプレゼンを行い、聞く側としてどんな印象を持ったのかを感じ、自分たちの次のプ

レゼンに生かそうという気持ちになったこと (Fig.2) も、この研修の成果である。

「思うようにプレゼンができなかった」と感じている教師が、ふだんの授業の中で発表の場面を大切にし、子どもたちに多くのプレゼンの機会を与え、指導するようになったことは、これらの研修に意味があったといえる。

(3) 研修としての効果について

プレゼンソフトの操作の習得を目的とせず、プレゼンそのものを目的としたところが、「情報教育研修=コンピュータ操作研修」という誤解を身をもって感じてもらうための研修として、目的を達成したものと思われる。

このように、機器の操作に加えて、その利用が授業に活かされるような研修内容を定着する必要があると考える。

5 参考文献

- * 1 情報教育の手引き 文科省 2002.6
- * 2 中川斉史 学習情報研究 (財) 学習ソフトウェア情報研究センター p33-36 2002.7